慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山口節郎著 『社会と意味：メタ社会学的アプローチ』
Sub Title	Setsuo Yamaguchi, Society and Meanings : Metasociological Approach
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1983
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.56, No.5 (1983. 5) ,p.111- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19830528-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

山口節郎 著

『社会と意味――メタ社会学的アプローチ――』

(一)

……「自らが実践と一つであることを知つている」社会理論は、自らの合理化がその対象領域の合理化過程の一部であることを知つているはずである。対象領域の合理化は、これもまたesprit engagé からの解放として進められるであろう。つまり人々が自らが生きる体験地平が〈可能な一つの地平〉であることを洞察し、他に可能なそれとの関係で〈ここといま〉を捉えなおすことによつて、既存の地平への帰依あるいは跼蹐(きょくせき)から自らを解放してゆく過程である(本書、二三九頁)。

われわれがさまざまな脈絡において「自らが生きる体験地平が〈可能な一つの地平〉であることを洞察し、他に可能なそれとの関係で〈ここといま〉を捉えなおすこと」を躊躇し始める時には、可能性は閉ざされ硬直化し、境界を固く画して敵対のるつぼに投げ込まれ易い。現代社会学の動きも、当然のことながら、現に起つている人間世界の歴史的諸変化と、他の諸学問・科学の動向との対応・緊張関係を欠落しては、捉えることはできない。

われわれの歴史的現実として、一方では近代化と産業化のもとに確実に機能的合理的展開と専門的科学とを一層追求して、人々の自立化と連帯化の可能性を少しずつきりひらいて歩み続けてきたが、他方では人間生活自体の一面化・断片化・管理化・疎外化・剝奪化が推し進められてきたことも見逃されない。そして、それらへの危惧が、すなわち、人間主体の受動化・没歴史化と科学の専門化・エリート化に対する不安と批判が、新たな問題意識とさまざまな社会・学問運動と実践とを生成させてきた状況がつくり出されているといえる。

現代社会学の状況においてみるなら、いわばパラダイムとしての構造機能主義にしろ、マルクス主義にしろ、産業社会についての没歴史的な「一般理論」を形作り、それに没入し実体化しそれを普遍的に信奉し、逆に脱イデオロギー化(体系化・体制化)する余りに、人間主体(人間と自然、人間と人間、人間と歴史の多様なかかわり、人間の生き方、意味構成)、人間と社会の実態、歴史的社会現象の研究が軽視されていくことに対して、思想的理論的にも反省と批判とが強くなされつつあるし、方法論についても新たな試みが繰り広げられようとしている。著者山口節郎(せつお)氏による本書『社会と意味――メタ社会学的アプローチ――』は、こうした問題状況を鋭く写し出して書

かれた好著である。

著者は〈ここといま〉に生きる人間と人間のかかわりを超越論的社会理論の立場から、社会科学及び社会学の過度の専門主義化を批判し人間中心主義の「意味」を再検討しようとする。全体を通じて極めて難解であるが、批判的社会理論の構築をめざす意欲的な論文集である。

本書の構成と論文の初出一覧を示すと次の通りである。

第Ⅰ部　「イデオロギー」概念の失われた意味を求めて

第一章　虚偽意識論（『思想』一九七二年一月）

第二章　「狂気」と物象化（原題「物象化」『精神衛生研究』一九七四年三月、国立精神衛生研究所）

第Ⅱ部　社会の超越論的理論に寄せて

第三章　現象学と社会学（『現代社会学』第三巻、一九七五年、講談社）

第四章　解釈的パラダイムから解釈学的パラダイムへ（原題「解釈学と社会学」『思想』一九七九年五月）

第五章　間主観性の〈原〉社会学（原題「間主観性の社会学」、安田三郎他編『講座・基礎社会学』第二巻、一九八一年三月、東洋経済新報社）

第六章　社会の超越論的理論（原題「科学論としての社会理論」、『思想』一九八〇年二月）

なお、著者にはP・L・バーガー、T・ルックマン『日常生活の構成』（新曜社）、A・グールドナー『社会学の再生を求めて』（共訳、新曜社）などの訳書もある。

(一)

第Ⅰ部「イデオロギー」概念の失われた意味を求めて、には第一章虚偽意識論、第二章「狂気」と物象化を収めているが、特に第一章は本書全体を貫く著者の基本的視座が据えられているといえる。虚偽意識論の再考察を手懸りにして、人間の行為と意識について、更に社会と人間の関連について〈創り―創られ〉、〈意味づけ―意味づけられ〉る相互規定的な関係を再確認し（一三頁）、われわれがいつの間にか物象化された意識に身を沈め無反省に紋切り型のイデオロギー批判をすることによつて自らの自由と創造性を譲り渡して社会批判に至る道を自ら閉ざしてしまうのでなく、「自己獲得的な社会」を模索する理論的構成が用意される。またこの章では「対象化」（人間は絶えず自己以外の世界に向つて意識的に自己を投企し、それを通じて自己及び他者にとつて何らかの意味ある対象を創造していく存在としてある）、「事象化」（自己対象化を通じて得られた創造物が、ある一つの客観的な事象（Sache）として人間に現われる過程）、「内在化」（意識による外界の意味づけ、ないし構成作業であり、客観的な事象が意識の主観的な構造を規定するような形で意識のなかに取り入れられる過程）、「疎外」（創造行為と創造物との間の統一性が失われ、人間がその創造物のなかに自己自身を喪失する過程）、「モノ化」（人間の創造物がもはや創造者によつて自己の所産であるとは認め難いような仕方で自立化し、それ独自の法則に従つて運動するに至る過程）、「物象化」（人間の創造物をあたかもそれ自体で存在する事物であるかのように見なす意識のあり方であり、「疎外」された形での「内在化」である）（一四―一六頁）という一連の諸概念がまず説明

される。

著者は「イデオロギー」ということばの氾濫にも拘らず、その本来の意味内容は不問にされ、見失われてしまつている（一〇頁）という問題提起から出発する。イデオロギー批判は、自明視している「存在」ないし「現実」の疑わしさを明るみに出すところにこそ成立するものである。しかしながら、「自己疎外的な社会」「モノ化した社会」では社会と人間の相互規定的・相互媒介的関係が見失われ、われわれの意識は「人間的諸現象をそれ自体で存在する自然的事物に似たものに還元してしまい、それが創造されるに至つた実際の過程を忘れ去つている」「物象化された意識」（verdinglichtes Bewußtsein）と化する（二三頁）。この物象化された意識はまさに「虚偽意識」（falsches Bewußtsein）であり、イデオロギーとは「物象化された意識の理論的表現」である（二三―二四頁）。

日常生活とは無縁なところに成立する巨大な力としての「疎外された歴史」、出来事の背後に潜む本質的契機についての認識を妨げがちな「自動化したリズムとしての日常生活」、宗教や神話に潜む「時間の空間化」、役割の属性としての人間の「役割関係の還元」、「科学における物象化」、同じように匿名性や超越的要因属性に身を委ねようとする「人種主義的思考法」、あれかこれか・黒か白かの画一的で強制的な他律的な思考としての「黒白的様式」等々といつた物象化された意識状況におかれがちである。物象化された意識状況の特徴は「人間からその自由と創造性を剝奪し、彼を専ら受動的な存在に転落させるところにある」」（三六頁）。そして虚偽意識としての物象化された意識が理論的に装置されることによつて（イデオロギーとして）、現状の固定化と秩序維持に奉仕するものとなる。このような意識過程を明らかにすることによつて、われわれがおかれている意識状況を逆に照らし出し、意識批判、イデオロギー批判のもつ実践的機能と「弁証法的方法」（一四頁）を洞察し回復させようというのが第一章のねらいと読みとれる。ただし、紙数の制約もあつてか「自己獲得的な社会」といい、「自己疎外的な社会」の洞察といい、文脈の中に充分に説明されずに余りに単純化されて設定されて諸概念が配置されている感を受けなくもない。物象化過程や解放化過程についての理論的・経験的解明こそが必要なのではないだろうか。

第二章の「狂気」と物象化もやはり第一章に連らなる同じ問題意識と分析視座に貫かれている。ここでは、特にE・ミンコスキー、L・ビンスワンガー、そしてJ・ガベル等の精神医学の諸研究を踏まえて、文化現象としての〈狂気〉と〈正気〉、〈病者〉と〈健常者〉の関連を意識批判という視点から論じられている。人があるいは自分自身が「分裂病者」であるとする判定をめぐつて、著者は(i)自然（人間とモノの関係）、(ii)社会（人間と他者の関係）、(iii)自我（人間と自己自身との関係）との係わりにおいて「疎外」と「物象化」のそれぞれの意識の特徴（それらに共通しているのは、自己をとり囲む世界との生き生きとした関連が失われており、人間とその世界の間に成立している根底的な弁証法―相互媒介性―を欠落していることである）を明らかにする試みを通じて、実は判定基準の自明性・実証性・認識自体が疑わ

しく判定基準そのものについての批判的検討という存在論的考察が必要とされるのである。

「〈病者〉と〈健常者〉（〈正気〉と〈狂気〉）における存在と意識の論理の平行性、ないし相似性」（六七頁）こそここで見い出される結論であり、判定基準それ自体の妥当性が疑わしくなる。「われわれが自らの存在を疎外し、否定するような形でしか接触し得ないような現実――こうした現実は独立した判定基準になり得るのかどうか。それはむしろ虚偽の現実ではないのか。もし現実が虚偽のそれでしかないとすれば、それとの生きた接触とは虚偽への自己適応、虚偽への無批判的コンフォーミズムでしかあり得ないのではないか。」（七一頁）

次に第Ⅱ部「社会の超越論的理論に寄せて」は、第Ⅰ部で明らかにされてくる課題である「物象化現象からの解放の理論的可能性」（三七頁）をめぐつて展開されている。「……物象化のこうした間歇的な解決ではなく、構造的な克服は如何にして可能なのだろうか。それは歴史の偶然的なチャンスを座して待つのではなく、社会そのものを事物化するような形でしか創出し得ていない、われわれ自身の人間関係の変革にこそ求められるべきであろう。……というのも、人は自己の営為を意味づけつつ自己対象化を遂行するからであり、自己対象化のあり方が、同時にまた意識のあり方を規定するからである」（三八頁）という課題設定に連なる。

そこで、まず第三章現象学と社会学では、今日依然として〈現象学的社会学〉、〈実存主義的社会学〉、〈エスノメソドロジー〉、〈人間主義的社会学〉、〈再帰的社会学〉等々のようにさまざまの研究動向に共有される《現象学的アプローチ》を中心に考察されている。つまり、われわれが日常的世界のなかに埋没し、〈疎外〉されていた状態から自らを救出し、それを自己自身に対して透明化する作業としての現象学的反省、「意味を付与する意識の構成作用」（八一頁）が問題となる。

われわれが、日常生活のなかで周囲の世界や事物に対してごく素朴にふるまい、そこにあることを疑わず、自明視しつつそれらと交渉している限りでは、日常生活の存在根拠を問うことはない（日常生活における存在問題への判断停止）（自然的態度のエポケー）。また、科学的態度、「科学的認識もまた世界の存在と意味についての日常的ないしは自明的な理解の上に立っており、そこでの知識を科学的認識を通して完成する自然的態度の延長でしかないのである」（七七頁）。「自然的態度における熟知され、親しまれた世界がかえつてそれについての真の認識を妨害し、この世界へのわれわれの囚われ、つまり既成性への拝跪、を強化するのである。」（七八頁）

現象学は、世界とのこうした馴れ合いを断ち切つて、〈存在との近さ〉（Seinsnähe）を回復しようとするものであり、自然的態度に伴う一切のドクサ（臆見）、先入見を退け、既知なるもの、自明なものをいつたん〈括弧に入れ〉（einklammern）、あらわれるがままの事象そのものへとまなざしを向けていこうとする。（〈現象学的還元〉あるいは〈現象学的エポケー〉）（七九頁）。このようにして、《現象学的アプローチ》にみる哲学、現象学、更に言語学との結びつ

き、あるいは回心を基礎にした社会学の再構築の動き（既成社会学・社会科学への挑戦）をどのように評価すべきかというのが本章のねらいである。しかし、さまざまの潮流としての《現象学的アプローチ》を統一的に位置づけ評価するのは難しいことである。著者は、ヒープとロスに従つて（J.H. Heap & P.A. Roth, "On Phenomenological Sociology," A.S.R., Vol.38, 1973）、《現象学的》社会学のタイポロジーを(1)「社会的行為の理解における意識と主観的意味の先位性を強調する緩い意味で現象学的と呼ばれるもので、その哲学的な視座を応用している社会学」（W・J・トーマス、クーリー、ミード、ウェーバーなど）、(2)「その基礎として明確な現象学的、哲学的視点をとり入れているもの」（A・シュッツ、バーガー、ルックマン、ホルツナーなど）、(3)「再帰的ないし反省社会学（reflexive sociology）」（グールドナー、オニール、D・スミス、シクーレルなど）、(4)エスノメソドロジー（ガーフィンケル、ポルナー、ウィーダー、D・H・ジンマーマン、更にH・サックス、E・シェグロフ、A・ブルーム、P・マッキュー等も挙げられている）という四つの分類に依拠しつつ、現象学の問題関心と社会学のそれとを結びつけながら独自の研究領域をつくり上げている(4)エスノメソドロジーをとり上げる（八五―八九頁）。

エスノメソドロジー（ethnomethodology）は、従来の社会学を〈因襲的〉、〈客観主義的〉、〈絶対主義的〉なものと批判して、それらの欠陥として〈物象化の誤謬〉、〈抽象主義の誤謬〉を克服しようと試みる。エスノメソドロジーが「関心をもつのはいかにして人々は社会的制度や規範、階級、組織、あるいは社会的価値や理念、等々といつたものを客観的にリアルなものとして構成し、また社会的行為をそうした現実と結びつけて解釈したり説明するか、というその〈方法〉、あるいは〈手続き〉」であり、「人々の意味形成の方法」（people's sense—making methods）である（九六―九七頁）。それは「現象学的経験主義」（Phenomenological empiricism）と呼び得るものである（一〇三頁）。エスノメソドロジーは、人々の意味規定としての日常生活（日常的生活世界）と常識（日常的知識）にこそ着目し、社会学者もまた素人メンバーと共有している常識こそが学の前提になつていることを示すことによつて、「社会学が忘れがちな自らの成立の根拠と、社会学と日常的世界とのつながりを反省しなおすうえで、重要な手がかりを与えてくれているといえよう」（一〇六頁）。しかしながら、反面において、その意味構成における認知的構成主義、ないし主観主義、「主観的解釈の公準」（シュッツ）に傾く余りに社会的現実の客観的意味が見失われ「エスノメソドロジー的無関心」の循環に陥つてしまうディレンマにおかれかねない。永遠のエポケーは果してどこまで可能なのであろうか。

「エソノメソドロジーの場合、すでにみたように研究対象は行為者の経験的意識に求められていながら、その目的とするところは行為者によつては気づかれてはいない意味構成のメカニズムの解明、ということにおかれていた。つまりそれは超越論的な視点からする生活世界の経験的な分析をめざしており、だからこそ自明視された社会的現実への存在信念を停止し、社会学的〈異化〉戦術（perspective by incongruity）を採用せざるを得なかつたのである。」（一

二二頁）著者はエスノメソドロジーによる問題提起と解釈的な実践を積極的に評価しつつ、超越論的理論構成の重要性を確認していくことになる。

第四章解釈的パラダイムから解釈学的パラダイムへ、第五章間主観性の〈原〉社会学、も第三章の延長として同様に現象学的社会学への疑問について超越論的理論構成の視座から問題を提起しているところである。

第四章では、「行為」と「意味」の関係をめぐつて、(i)行為の「主観的意味」に注目する立場、「解釈的パラダイム」（行為や相互作用を不断の意味解釈過程・意味付与過程として捉える。シュッツの現象学的社会学、ガーフィンケルたちのエスノメソドロジー、ブルーマーたちの相互作用論など、(ii)行為の「客観的意味」に注目する立場、「規範的パラダイム」（人間の行為は彼らの外部にある一定のルールによつて支配されており、個々の行為や相互作用はこうしたルールの〈事例〉、〈具現化〉とみなされる。パーソンズ流の構造機能主義）（一三三―一三五頁）（T.P. Wilson, "Normative and Interpretive Paradigms in Sociology", J.D. Douglas (ed)., Understanding Everyday Life, Chicago, 1970）という二つの立場が設定される。これに対して著者は、「解釈的パラダイム」を評価しつつも、ハイデガーやガダマー（H.G. Gadamer）等の諸説を中心に「解釈学的パラダイム」を対置することによつて、「認識の方法としての理解」対「世界への帰属性としての理解」、「動機理解対意味理解」、「他者理解対自己理解」を対照させる。そうすることによつて、「解釈学的パラダイム」は「「解釈的パラダイム」が視野の外に放置してきた「意味」がもつ社会的・歴史的な次元と、「理解」がもつ存在論的次元との解明に力を注いできているように思われる」（一四〇頁）と位置づけ、「解釈学的パラダイム」への脱皮を説いている。

「間主観性の〈原〉社会学」と題された第五章も、間主観性（intersubjectivity）、間主観的な意味解釈過程をめぐる現象学的社会学の立場への疑問として展開されている。ここでは特にウィトゲンシュタイン（L.Wittgenstein）（『哲学研究』大修館、一九七六年、『確実性の問題』大修館、一九七五年、『数学の基礎』大修館、一九七六年など）の「言語ゲーム」論を素材にして、「我々はいかにして間主観的世界を構成するのか」（「他我の一般定立」）を問うのではなく、――あるいはそれを問うのに先立つて――「我々はいかにして間主観的世界の住民になつていくのか」、あるいは「我々はいかにして間主観的存在として構成されるのか」（「生活様式の一致」、「我々の一般定立」Generalthesis des Wir）を問わなければならない、とする（一八四頁）。

さて、終章の第六章社会の超越論的理論では、広く科学を可能にする〈地平〉そのもの、あるいは超越論的条件の問題が考察される。クーンの「パラダイム理論」、ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」論に代表される科学的真理のコンテクスト依存性についての主張、マンハイムの知識社会学、最近の「社会学の社会学」や「再帰的社会学」の主張などにみるように、科学ないし社会学を可能にしているその〈下部構造〉を明らかにしようとしている。「……こ

こでは科学ーといつても、私の場合、社会学にその対象は限られるのであるがーを、それを可能にしている社会過程との関係において把えることの意義について考えてみたいと思う。というのも、こうした自己自身の成立根拠についての反省がない限り、科学はその合理性を獲得できないであろうと考えるからである。」（二一八頁）

この章では社会科学のこうした超越論的基礎づけの問題について、専らN・ルーマン（Niklas Luhmann）のシステム論的社会理論をとり上げて検討し批判している。ルーマンは最近とみに注目されている学者であり、佐藤勉氏は「ルーマンの社会理論は、パーソンズ理論の最も良質の批判的継承であるといえるし、こうしたルーマン理論をどう前進させうるかを離れて、八〇年代の社会学の展開については語れないであろう」と述べている（『木鐸』六号、一九八二年五月）。

少々引用が長くなるが、著者がルーマンのシステム的社会理論の基本的な特徴に言及しているところを引用しておこう。「ルーマンの出発点にあるのは、われわれの生を究極的に意味づけるものは何なのか、あるいは人間の共同生活の秩序を支える究極的な根拠は何なのか、というすぐれて哲学的な問題である。」（二二〇頁）「社会の分化とともに世界はその統一的な意味を喪失し、それを基礎にして制度化されていた社会秩序の原理は、全体的な社会に対する拘束力を失つてゆく。……むしろそれは「可能なもののカオス」として、逆に生を脅かす〈問題〉として立ちあらわれる。こうした時代にあつてなお生を意味づけ、それを方向づけるべきものがあるとすれば、それは何なのか。……それは……「可能なもののカオス」＝「複雑性」としての世界に秩序を付与すること、つまり「世界の複雑性の縮減」（Reduktion der Weltkomplexität）である。世界の複雑性の縮減という生を方向づける最も根源的な機能を担うもの、これをルーマンは「意味」（Sinn）と名づけ、この意味を構成する主体を「システム」と名づける。」（二二〇頁）「つまり人間の共同生活は意味によつて世界を秩序化するシステムのはたらきに基礎づけられている、というわけである。こうしてルーマンは「システム」という経験科学的な概念の手をかりて、「いかにして社会は可能か」という超越論的な問題に立ち向う。」（二二〇―二二一頁）

そこで、ルーマンの著書 Soziologische Aufklärung, Köln/Opladen, 1970. Soziologische Aufklärung, Bd. 2, Köln/Opladen, 1975. Zweckbegriff und Systemrationalität, Frankfurt, 1975. Funktionen und Folgen formaler Organisation, Berlin, ²1972. J.Habermas und N.Luhmann, Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie, Frankfurt,1971. などを参照して、ルーマンの社会理論の骨格を(i)意味形成の分析にかかわる現象学および解釈学の伝統、(ii)方法としての機能主義、(iii)理論モデルとしてのシステム理論、の三つに整理して（二二一頁）、検討を加えている。(i)現象学・解釈学についていえば、これは世界の間主観的構成の問題にかかわるところである。生を方向づける最も根源的な機能、つまり可能な体験と現在の体験とを何らかの方法を通じて統合していく「体験加工」（Erlebenisverarbeitung）の機能、を担うものが「意味」で

あるとすれば、「意味のこうした機能」は「複雑性の縮減と維持とを同時に可能にする。」（二二三頁）すなわち、〈カオスの秩序化〉と〈選択にもれた諸可能性の否定〉によって複雑性が縮減されると共に、「……当初の選択遂行が期待外れの結果に終った場合には、それと機能的に等価な他の可能性を選びなおす」、「必要とあらばいつでも新しい、別の選択遂行の拠所（Woraus）として利用されうるように保持される」ことで「複雑性の維持」というもう一つの機能を果すものとして捉えられる。「…行為者によって思念され、体験されている意味を、行為者によって同時に思念（mitgemeint）されておらず、またその体験地平を超越する意味地平との関係において解明する」（二二四頁）ことになる。

「「意味」問題をこうした超越論的レヴェルで捉えるルーマンの方法は、意味を「主観的に思念された意味」として行為者に帰属化し、理解的方法によってその再構成をはかる従来の行為論的アプローチ（ウェーバー、パーソンズ等）および現象学的社会学派（シュッツ、バーガー等）に対する批判を含んでいる。（二二五頁）

(ii)機能主義をめぐっては、従来の「因果科学的機能主義」（〈機能〉は全体（目的）に対する部分（手段）の寄与として考えられ、「因果的関係の特殊例と考える因果科学的機能主義」）、「構造—機能的理論」に対して、「等価機能主義（äquivalenter Funktionalismus）」（「ここでは一定の原因と一定の結果との間の法則的な、あるいは多かれ少なかれ蓋然的な関係が問われるのではなく、問題的な結果という観点からするより多くの可能な諸原因の機能的等価性を確定することが主題となる」二二九頁）、「機能—構造理論」を対置する。

「こうした「等価機能主義」の〈機能〉が何であるか、はすでに明らかであろう。比較法、あるいは代替準則としての機能主義は、行為者の体験地平を超える規制的な意味図式を設定し、そこから索出される機能的に等価な他の問題解決法を行為者に提供する——行為選択肢のレパートリーを拡大する——ことによって、その行為をより合理的なものにするわけである。」（二三〇頁）

ルーマンの社会理論の第三の柱である(iii)システム理論であるが、システムは「複雑で変化する環境のなかで、内—外の区別の安定化によって自己を維持する自己同一性（イデンティテート）」として定義される。そして機械や生物と違って社会システムは、「意味を構成するシステム」「意味システム」（Sinnsystem）であり、高い環境適応力（自己複雑性の強化による環境複雑性の吸収力）をもつものである。ルーマンによれば、社会システムの自己複雑性を高め、それらの進化（Evolution）の度合いを示すメルクマールになるのが、システムの内的分化——機能的分化——である（二三三頁）。また全体としてシステムは、「政治」、「経済」、「家族」、「科学」といった下位システムをもち、下位システムの機能遂行の成果の交換・伝達のための「メディア」として「権力」、「貨幣」、「愛」、「真理」といった「一般化された交換メディア」ないしは「コミュニケーションのメディア」を必要とする。

「……社会システムは自己超越的、あるいは創発的な特性をもつ「意味」によって構成される〈世界解放的〉なシステムであるからである。社会システムは構造によって与えられるのではない。むし

ろそれは、必要とあらば自らの構造をも変形しつつ、可能なものに向けて不断に現在の体験を加工していく意味のアイデンティティによつて保証されるのである。」（二三三頁）

以上のようなルーマンの社会理論の特徴づけを試みた後で、著者はその社会の超越論的理論構築、行為合理性とシステム合理性の分離、及び行為合理性に対するシステム合理性の先位性の主張等を積極的に評価する。しかしながら、著者は、ルーマンの社会理論のこうした強みは逆説的にまた最大の弱点でもあるとする（二四一頁）。〈システム〉の形成について説き得ないし、〈意味〉は脱実体化され、それ自体としては内容をもたない機能そのものとして定義されており、〈世界〉の存在性格は問わずに潜在的な〈システム〉を対自化しえないでいる、そして普遍的なシステム理論は「普遍的な社会工学」へと変質してしまう、と批判する。

「その社会理論は「自己洞察」をもつて主旨とする約束であつたにもかかわらず、ルーマンの理論には超越論的反省が占めるべき場所がない。」（二五七頁）「……ルーマンのシステム理論は、〈実証主義〉に劣らず、それ自らがすぐれた意味での一つのイデオロギーである、というこうになるであろう。」（二六〇頁）

（余録になるが、Günter Hartfiel, Wörterbuch der Soziologie, Zweite, überarbeitete und ergänzte Auflage, Kröner, 1976, S.405. によると、N・ルーマン（Niklas Luhmann）は一九二七年一二月八日にドイツの Lüneburg に生まれ、法律学及び社会科学を学び、官職を経て、一九六二年にシュパイアーの行政学大学の研究員、一九六六年にミュンスターで大学講師、一九六八年にビーレフェルト Bielfelt で正教授に就く。組織社会学と行政社会学。構造—機能理論とその社会科学への発展、システム理論を展開。方法論、法社会学、政治社会学についての多数の研究業績がある。著書として次のものが挙げられている。

Funktionen u.Folgen formaler Organisation, 1964; Grundrechte als Institution, 1965; Recht u. Automation in der öffentl. Verwaltung, 1966; Vertrauen. Ein Mechanismus der Reduktion soz. Komplexität, ²1973; Zweckbegriff u.Systemrationalität, 1968; Legitimation durch Verfahren, ²1973; Soziologie der Aufklärung, ⁴1974; Politische Planung, 1971; (mit J.Habermas), Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie, 1971; Rechtssoziologie,1972; Personal im öffl. Dienst (mit R. Mayntz), 1973; Rechtssystem u. Rechtsdogmatik, 1974; Macht, 1974).

（現在のところ邦訳としてN・ルーマン著、村上淳一・六本佳平訳『法社会学』岩波書店、一九七七年がある。その巻末にも詳しい著作目録、著者紹介が付されている。）

（三）

現代社会が「可能なるもののカオス」的な変動状況にあるとしたら、自然—社会—人間の関係やあり方を《創り——創られる》、《意味づけ—意味づけられる》相互規定的・相互媒介的な関係として問いかけ直される必要があるし、科学、社会学もまたその置かれている地平との関連や地平そのものを捉え直していかざるをえない。このような状況に本書を位置づけて読み取るならば、われわれ

にとつて本書は今日の社会学上の問題状況を知るうえで鋭い問題提起の書といえるだろう。著者が本書を通じて意図した(i)人間あるいは意識を世界の基礎とする社会へのヒュマニスティックなアプローチへの関心と疑問、(ii)専門科学としての社会学、「専門性」の追求についての疑問を論理的に展開する試みは一応達成されているともいえる。われわれは社会学や社会科学に専門的に徹しようとするあまりに、かえつて〈社会的なるもの〉を見失いかねない。この意味で本書の副題が「メタ社会学的アプローチ」と付されているのも、「専門科学としての社会学が専門性に徹すれば徹するほど、そこから落ちこぼれていくように思われる〈社会的なるもの〉の存在論的次元に掬してみたい、という希いがあつたからである」（「あとがき」、二七三頁）とするのも頷けるところである。

本書はまさにわれわれの「地平」そのものを対象化しようとするこの理論的課題への著者の絶えることのない思想営為であり、極めて意欲的な挑戦である。この課題をめぐつて、哲学、言語学、科学論を始め、著者の関心は広範であり文献渉猟や註釈も実に内外に広く驚くほどである。読書の進め方、研究の仕方という点でも教えられることが少なくない。

しかし、この問題提起の書、いささか難解な本書に対して、結びとして敢えて筆者の多少の読み間違いを含めていくつかの問題（というより筆者自らの関心）を挙げておくことにしよう。(i)本書がいくつかの雑誌、紀要、講座などに別々に発表された諸論文から構成されているという性格もあつて、第Ⅰ部イデオロギー（虚偽意識）論と第Ⅱ部の現象学的社会学に関係した超越論的社会理論とのつながりが、ここでは理論的に充分関連づけられていないことである。「イデオロギー」、「意識」と「意味」、「意味構成」、更に「対象化」「事象化」「内在化」「疎外」「モノ化」「物象化」、「間主観性」、「システム」等々の重要な概念も、各章で中心的な理論研究に関連して用いられているとしても、本書全体を通じての理論的な概念構成にはなつていないようにも思える。(ii)本書の課題と離れてしまうことになるかもしれないが、社会学における専門性への疑問としての「メタ社会学的アプローチ」の志向は、同時に社会学の内なる「可能なるもののカオス」としての諸パラダイムを見据え、それぞれを掘り下げて丹念に捉え直す作業をも必要としているのではないだろうか。理論家ひとりひとりの考察についても、やはり同様のことが云えるだろう。

(iii)社会へのヒュマニスティックなアプローチとメタ社会学的アプローチという時に、いみじくもP・L・バーガー＝T・ルックマンは「それが意味しているのは、社会学は人間を人間としてとり扱う諸科学の一団のなかにその定位置をもつているということ、つまりこうした特殊な意味において、それは人間主義（ヒューマスティックス）的な学問である、ということである。こうした捉え方から導き出される重要な結論は、社会学は歴史学と哲学という二つの学問との不断の対話のなかで作業をすすめなければならず、このことを忘れると、社会学はその本来の研究対象を見失つてしまう、ということである」（『日常世界の構成』新曜社、三二〇頁）と述べていた。その限りでは、歴史学との

対話は著者の理論構成の中に基礎づけられているとしても、本書についてはそれらが散見されるのみで必ずしも明確ではなく、むしろ哲学、解釈学との対話が強調されるところで終始している。生きる人間の「疎外」、「物象化」、「生活世界」等の存在内容についての歴史的な問いかけこそが大切であろう。従って、それと関連して(iv)超越論的社会理論と経験的分析・調査研究との関連についても、もう少し言及していただきたかったとも考える。

いずれにしても本書は著者の広い学識と並々ならぬ批判的社会理論構築の意欲に満ちた鋭い問題提起の書であることに疑いない。歴史の変動状況においては、古典理論をどのように現代化しつつ、ひとしくその状況のもとでのいかに自らの体験加工をなしどのような理論構築を試みていくか、共に問われるところである。本書に接し得たことに感謝したい。

（二七八頁・一九八二年二月・勁草書房・二二〇〇円）

川合　隆男